

第 4 回 伊平屋村産業経済活性化協議会 議事録

林会長 これより第 4 回伊平屋村産業経済活性化協議会を開催します。どうぞよろしくお願い申し上げます。

本日の議題に入る前に、委員の異動がございますので、ご報告させていただきます。まず、伊豆味委員に代わりまして、新しく商工会長に就任されました宮城普巳嗣委員、それから是枝委員に代わりまして、松金ホテルの津田真樹子委員、木村委員に代わりまして、株式会社みらいおきなわ代表取締役社長の宮里尚委員が就任されております。本日はこちら 3 名のうち、津田真樹子委員がご出席されておりますので、まず津田委員の方から、ひとこと自己紹介をお願いしたいと思っております。

津田 おはようございます。

私は松金ホテルに従事しております津田真樹子と申します。今回この重要な会議に参加させていただくに当たって、島はどうなるんだろう、これからいい島をつくっていききたい、そんな想いをもちながら、自分も勉強しながらの参加となります。みなさんと一緒にしっかり考えていききたいと思っております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

林会長 ありがとうございます。

続いて、今までは是枝委員に副会長にご就任頂いていましたが、委員の辞任に伴い、この協議会運営要綱第 5 条第 4 項の規定に基づきまして、新たに副会長の指名をさせていただきたいと思っております。副会長には、本日はご欠席ではございますけれども、伊平屋村商工会会長の宮城委員を指名させていただきたいと思っております。なお宮城委員には事前に承諾をえておりますので、併せてご報告させていただきます。

林会長 本日の出欠状況でございます。宮城委員、佐久川委員、金城委員、仲川委員、石原委員についてはご欠席となっております。また、宮里委員に代わりまして、譜久村みらいおきなわ代表取締役常務が、安里委員に代わり、観光協会の金城事務局長にご出席いただいております。

林会長 本日の会議は非公開にて開催させていただきますので、ご了承をお願いします。前置きが長くなりましたが、本日の会に際しまして、村長からご挨拶を頂戴したいと思います。

村長 みなさん、おはようございます。11月のお忙しい時期なんですけど、お集まりいただきありがとうございます。

先だって行われました、第30回伊平屋ムーンライトマラソンは、島がひとつになれた大きな成功の証です。みなさまに感謝申し上げたいところであります。本日はこの伊平屋村産業経済活性化協議会が4回目ということで、過去3回いろんなことについて議論してきましたが、非常に闊達な議論ができたものと思っております。今般は人口ビジョン2050についての議論をしていただくつもりです。とりわけ将来の人口推計では、本村だけでなく、沖縄の離島や地方など、全国的に人口が減少している。本村でも人口が減り、過疎に向かっている。どうすればこの過疎を、人口減少を食い止められるかが、一つの大きな課題になっております。少しは横ばいになってるのかなと思ってるんですけども、2030年には千人を割るという推測がされています。どうしたら都会への人口集中をなくして、地方に人が集まる仕組みをつくることができるのかが、離島含め大きな課題と思っています。本村においても、住宅事情がありまして今行政としても非常に危惧しています。いずれにしても、これから将来に向けて、住宅の整備や観光のキャパシティをどう増やし、整理していくかが課題になっていますので、できることを優先してやっていきたいと思っています。今日はそのことについて、大いに皆さんから忌憚のない意見をいただいて、課題に取り組もうと思っていますので、よろしくお願いします。

林会長 ありがとうございます。

それでは、次第に沿って議事を進行させていただきたいと思います。本日の議事は1つとなっております。伊平屋村人口ビジョン2050の素案について、まず事務局の方から、ご説明をお願いします。なお、かなり長文となっておりますので、適宜、委員の皆さんからのご質問等含めて進行をお願いしたいと思います。

太田 承知いたしました。

それではお手元の資料2、伊平屋村人口ビジョン2050（素案）という資料に基づきまして、ご説明差し上げたいと思います。先程会長の方からご指示いただきましたので、途中1章ごとに皆さんの意見をいただきながら、説明を進めさせていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

人口ビジョンについては、事前に委員のみなさんにはざっとご説明を差し上げているところですが、改めてきちんとした形でご説明を差し上げたいと思います。この内容に入る前に、一つこの2050の源流は何か。アマゾン川だって最初は小さな川のせせらぎから始まっているわけですが、この人口ビジョンのそもそもの源流は何か言いますと、「文化度ではないか」と思っています。

文化度をいかに高めていくか。この伊平屋村、非常に文化度が高かったのではないかなと思うんですけど、それを取り戻し、もっと文化度を高めていけば、究極、世界中から人が集まってくるのではないかと考えています。その文化度をいかに高めるかという観点を出発点にまとめさせてもらっています。まずは皆さんそこを念頭に置いた上で、ご説明をお聞きいただければありがたいと思います。

太田 ～ 資料 2 に沿って説明 ～

I はじめに 今なぜ「伊平屋村 人口ビジョン 2050」を決議するのか？

- ・人口は半減、生産年齢人口と高齢者人口がほぼ同数に
- ・発表される度に下方修正される将来推計人口
- ・これまでの対応に欠けていたこと

林会長 一応導入部分になりますが、率直にいまご説明いただいた部分について、どうでしょうか。

名嘉 先日、茨城県の境町というところに北部 12 市町村長で研修に行って橋本町長の約 2 時間の講演を聞きました。我々がこれからやらなきゃいけない課題への取り組みの大きな参考になりました。

この町が何をやっているかというところ、まずは住宅の整備。一戸建てを何戸も作って、そこに家賃を払いながら 25 年住み続けると、土地ごと一戸建てを無償譲渡する取り組みをしています。ほかにも、教育、スポーツといろんな取り組みをしています。観光地もなにもない、ただ農業だけの町に高速道路があって、そのインターチェンジに大きな施設の整備をしたりしています。まず行政がしっかり稼ぐ、財源を増やしていくことによって住民サービスを向上させていく、まさに伊平屋村がこれから取り組まないといけないことだと感じました。

境町は六十数億という借金を返して、いまは借金がないんです。橋本町長は 3 期目が終わり 4 期目に入ってるんですけど、町が稼ぐという取り組みをずっとやってきているんです。農業にしてもですね、儲からない農業はもうやめさせると、儲かる農業をさせる。米もそうなんですけど、すごい付加価値をつけて高く売ったり、生産農家として若い人たちもそこに来て仕事ができるような、そういう仕組みをしっかりと作っている。そういった点で、我々も大いに学ぶべきだなと思っています。とにかく行政がしっかり稼ぐということをやりました。大きな企業を誘致し、そこに大きな施設をつくって家賃と固定資産税をとるということには、無駄がなく、全てにおいて稼いでいる町という印象を受けました。

英語教育にもものすごい力を入れているんですね。フィリピンから先生達を呼ん

でやっています。そして施設では、全国から来た地域おこし協力隊の人たちが活躍しています。そういうことでこの町に来てよかった、ほんとうに町長に感謝していますというのがみんなの意見です。ですから、我々も伊平屋村がどうやって稼いでいくかという課題を進めていく中で非常に勉強になったなという印象を受けました。

林会長 非常に若い町長ですね。町長自ら外からお金をもってくるってということで、いろいろやられていて、いまは干し芋をふるさと納税の返礼品でやられていますね。

名嘉 今ふるさと納税は99億円。農家さんに芋を作らせている。農家さんは葉たばこなんかを作っていたのですが、全然儲からない。そこで、ぜんぶやめさせて、紅はるかという芋を作らせて全部町が買い上げる。加工は整備した干し芋を作る施設に全て任せる。農家さんは一生懸命芋をつくるだけです。そういう仕組みで作った干し芋をふるさと納税の返礼品にしている。それで、その干し芋が健康に良いと見直されているということで、アスリートや美容とかですね、そういうことで、もう全国から引き合いがあるということで、非常に儲かっている。

それとうなぎです。利根川が近くにあるってことで、利根川のうなぎの復活を狙って取り組み始めたようです。我々が訪ねた時は、結局うなぎは宮崎産だったんですけども、宮崎で捌いたうなぎを生で持ってきて、焼いて、パック詰めにして、これもふるさと納税でやりました。あんまりふるさと納税ばかりやってたんで、町民から怒られて、地元でもウナギが食べられる場所を作れということで、町がうなぎ屋を整備して貸し出しました。そうするとそれが新たな稼ぎを生み出すということで、全てが稼ぎにつながっている。

伊平屋村では、施設を造っても補助金を出して指定管理させているんですが、町長はそういうことはやめたほうがいいよとはっきり言いますね。ですから、みんなが稼ぐ。そうすれば、おのずと人がそこに流れてくるっていう、そういうことを言っていましたね。そうして、町長が役場いるのは月5日くらいで、そのほかは全国を飛び回っている。この経験はこれからの大きなヒントになりました。できることは可能性があったら全部やる、それとスピード感を持ってやらないと駄目だと思いますね。

林会長 いろいろな地域の事例もあると思いますが、とりあえずこういった人口の問題が深刻になっていることを踏まえた上で、次のデータに移って、数字を見ながらまた改めて意見交換を行いたいと思います。

太田 ～ 資料 2 に沿って説明 ～

Ⅱ 伊平屋村の人口変動等

- ・ 自然増減と社会増減
- ・ 出生率の推移
- ・ UIJ ターン

林会長 はい、ありがとうございます。

社会増減に関してはプラスマイナスゼロみたいな感じですね。

太田 ちょっとグラフが小さくなっていてわかりにくいのですが、極端な転出超過とはなっていません。2023 年で 9 名のマイナスです。ちなみに、隣の伊是名村 (2024[令和 6]. 01. 01 時点住民基本台帳人口 1274 名) は 2023 年で 11 名、座間味村 (同 870 名) は 26 名、渡嘉敷村 (同 675 名) は 11 名、伊江村 (同 4295 名) は 36 人、久米島町 (同 7279 名) は 82 名の社会減となっています。

林会長 先程お話しがあったところで言えば、自然減は仕方ないとしても、社会増は条件整備次第ということですね。住むところなのか、仕事なのかとかも含めて。

太田 はい。

7 ページの図表 5 の 2000 年の人口ピラミッドで、二十歳前半からぐっと人口が増えてるのは、ひとつには公共事業がその当時結構あったからなのかなと思っております。島で公共事業に伴う土木建設業の仕事があり、高卒・専門学校等卒で島に帰ってくる青年がいたのかなという推測はされます。ただ小泉内閣以降公共事業は減って、令和になって少し盛り返した (国の公共事業予算 8 兆円台) とも言え、新規の大型公共事業は少なくなって、既存インフラの維持・修繕であったり、国土強靱化、防災・減災というような公共事業がメインになっています。2000 年以前のように公共事業に頼るっていうのはどうなのかなというところで。そうなってくると、どうやってこの島で仕事を作り出していくか。村長がさっき仰った稼ぐ力を我々も身につけるしかない。この後でもこれは述べますが、その候補のひとつはやっぱり観光かなと思っているところでございます。

林会長 どなたか意見はございますか。

真栄田 今の人口減少という話はどの市町村もやっていることだと思うんですけど、それで同じような意見がどこもでていると思います。そういうところには、眼前の課題をひとつひとつ解消していつている今のやり方では、勝てないと思うんです

よ。来たい人がいますと、お家がないので建てましょうと。そしたらまた来年、再来年、来たい人がいると、じゃあ、お家建てましょう。そういったやり方では、人口減少は解消できないと思います。この2050年人口600名これはもうほとんど確実に予測される未来だと思います。そこに逆らうことは並大抵の努力ではできないんです。じゃあどうしたらいいかというと、2050年をゴールにして、今何をやるべきかというのを考えた方が良くと思います。V字回復を狙って。今話しているのは、全部同じで、予算を投入して人を呼びましょう、ということをやっているだけで、全然問題解決にはなっていないんですよ。5年後くらいの人口は多分増えると思うんですよ。企業誘致も5年後の人口を増やすためには有りだと思えるんですよ。ただそれは2050年問題の解決には全然なっていないくて、そういうことを、先にデータをもらって考えていたことです。

それで、この島がどこに向かっているのかっていうのが、俺が一番大切だと思うことです。沖縄県の中のひとつの離島をどういう理念・コンセプトでポジショニングしていくか。そこで2050年をゴールとしたとき、やらないといけない課題をもうちょっと明確にしていっていいのかなということを思っています。

太田 今の真栄田さんのご懸念については、後で出てまいります、正に私もそうだと思っていて。それはなにかっていうと、ひとつ沖縄観光を例にとりますけど、語弊を恐れず言うと、今の沖縄の観光戦略は東京から首根っこつかんで沖縄に連れてきてる観光にしか僕にはみえないんですよ。伊平屋もそういう観光をしていると、観光客も村民も疲弊するだけなんです。観光客が10万人に増えたところで、莫大なプロモーションを永遠にかけ続けられないといけない観光は、持続可能性がほぼゼロに近い。そうであれば観光戦略再興は、この島の文化度を高めて、世の中の人々が地球儀を回して、ぴかぴか光っているこの伊平屋って島は何なんだ、ということをおぼせる島を作ることが、究極の伊平屋の人口減への対策にもなりますし、我々がこの島で楽しく暮らしていく原点になるのかなと思っています。そういうことも個人的に思っています。

譜久村 すみません。この社会増減の転入者・転出者の具体的な属性っていうのは分かるんですか。

太田 すみません。細かいのはないんですが、移住者は比較的に海に関する仕事をする方が多いですね。

名嘉 役場もそうなんですけど、島外の人ほとんどで島の人就職が非常に少ない。採用試験をして、離島で一番目に来ているのが座間味なんですよ。那覇から近

いってのがひとつの魅力だと思います。

伊平屋は遠いー今帰仁から見えるんだけどーっていうイメージがあって。やっぱり船に1時間20分揺られる、船酔いするということもあってなかなか行けないって気持ちもあるようです。あと。島が知られていないってのも大きな要因だと思います。名護市の人でさえ「(伊平屋島って) どこ?」という人がいますね。認知度が低いのかなっていうのがあります。

最近、島を訪れた観光客や地域おこし協力隊員らが島の魅力発信を積極的に行っていて、伊平屋行ってみたいっていう人が増えている。だけどその人達がこっちに住むわけじゃない。宮古島もそうですけど、こどもが帰ってこない。家が作れない、家賃が高い、と非常に悪循環になっている。いずれにしてもインフラをしっかり整備して、近くしないと非常に行きづらいのかなと思っています。

譜久村 県内から来ているのか県外の移住者が多いのか、そこが知りたかったのですが。

太田 意外と県外が多いようですね。

譜久村 じゃあ県外から来て、県内の人が出て行っているという形になるのですか。

太田 15の春で出て行くんですけど、30代くらいから移住者が来るっていうパターンと、もう一つは、定期的な異動がある学校の先生とかいった方々が家族といっしょに来ると、一時的にばっと増えて、その人が2年後に家族共々島をでると、がくっと落ちたりする部分があります。役場も採用は全国から公募という形で試験しているので、役場にも当然県外の方が受験して入ってくるということもあったりします。

譜久村 異動で出て行って、代わりが入ってきたらイーヴンになります。新しく仕事で入ってきた人、また、定年退職した人の補充ということであれば評価できると思うんですけど、人事異動ではなく、村から働き手が移住しているのであれば、単純に自然減のものがどんどんどんどん減っていくという考え方になります。そうすると村長が仰ったとおり増やしていくっていうアプローチで、新しくいろんなことに取り組まないといけないのかなと思います。

太田 後で出てきますが社会減対策、自然減対策、両面からの対策をとる必要必要があるというところに伊平屋村はあるということは厳然たる事実です。

林会長 はい。

こうした現状を踏まえた上で、次の章をお願いします。時間の関係で4章まで続けて説明してください。

太田 ～ 資料2に沿って説明 ～

Ⅲ 基本的な考え方

- ・ 地域の将来は「自らの手で切り拓く」という「気概」
- ・ 若者と女性が暮らしやすい島
- ・ 豊かな暮らしの継承と将来世代への責任

Ⅳ 取り組むべき人口戦略

- ・ 定常化戦略と強靱化戦略
- ・ 定常化戦略における施策
- ・ 強靱化戦略における施策

林会長 はい、ありがとうございます。

今、人口ビジョンの基本的な考え方と、取り組むべき人口戦略、強靱化戦略と定常化戦略についてご説明いただきました。これを踏まえて皆さんのご意見をお聞きしたいと思います。

新垣 現状からいいますと、住む場所がないというのがまず問題です。現在村の方で移住定住の取り組みなども行われていますが、まずは住居、そしてそれを定住に繋げていく必要があります。

たとえば農業について、こういう農業をしていけば生活が成り立つというような戦略的なものがあれば、移住後のビジョンがたつのでよいかなと思います。

これでいけば、先程の説明に出ていたF大学の薬学部が（伊平屋には）薬草が多いということで、興味をもってきているそうです。昔は山も里山としてきちんと管理されて、薪を切り出すなど、エネルギー源だったんですが、今は山林原野です。かつて山がしっかり管理されていた頃、海にはアオサがいっぱい採れていました。今は全く採れなくなっています。その原因が山のせいなのかは別としても、薬草で山をもっと活かすということがあると面白いと思います。

それから、赤土流出の問題。たとえば前泊地区の赤土は何十年も流れている。赤土が流れて困るのは漁業者だけだという意見もありますが、それは違って、島の玄関口である前泊の赤土流出の影響は観光業などにも及びます。そこで徹底的に赤土流出のない島をめざして、島がひとつになって取り組む必要があります。

話が飛び飛びになりますが、観光業について、従来の観光では、クマヤ洞窟など

のスポットをまわるだけで終わってしまう。そういう在り方では長続きしないと思います。私なりの考え方ですが、たとえば村魚のイシミーバイを養殖・放流し、それを昔ながらの釣り竿で釣るといった体験型観光を提案します。先程も太田調整監からお話がありましたサングもそのような形になっていくかと思います。そういう体験型観光の導入といった取り組みをしていかないと、続いていかないかなと思います。

それからF大学が何回か来島していて、海水を採取してDNA解析するとそこに何が棲んでいるかということがわかる環境DNA解析という手法があるそうです。そういう学校を誘致して環境問題など、いろんな問題をお互い取り組みできれば、もっとスピーディーにできるのかなと思います。

それからさっき山の話が出ましたが、トリュフが沖縄にもあるということで、調査はされていませんがこの島にもないかなと期待しています。あとは、コーヒーなどいろいろなことがやられていますので、そういう新しいものにも、(地方創生の)可能性があると思います。それと同時に、昔、稲刈りが終わった田んぼ畔周りの土を田んぼ中央に盛土してそこに野菜等を植え付ける「ターローシ」という農法がありましたが、そういうのをやっていけば、自ずと増収につながれるのではないかと思います。田名池にもいろんな意見があります。ここに金をかける必要があるのかという。ただ新たにものをつくるのではなくて、再生させるんですよ。それがまた観光にもつながる。もうちょっとスピーディーに進めてくれば、将来の島のあり様もみえてくるんじゃないかと。以上です。

林会長 確かに、おっしゃるとおりです。

この話に対してでもいいですし、何か意見のある方はいらっしゃいますか。

名嘉 農業のあり方ですね。既存の農業をこのままやり続けていくと、今の結果なんですよ。海はどうなってるかっていうと、やっぱ砂漠化してきている。その要因は何かっていうとやはり農業が関係してるのは、可能性として否定はできないっていうのが現実だと思います。

赤土の話が出たんですけど、サトウキビに依存しているっていうことが非常に大きな問題だと思います。今、毎年、黒糖が余っているんですね。JAさんが農業にどう取り組むかっていう営農指導もほとんどしない状況で、ただ漠然とキビを作らせ続けてるっていうのが、この赤土が出て一つの要因になってると思うんですよ。ですから、どれだけキビを作ればいいのか、多すぎても少なすぎてもよくない。そこで、それに代わる複合的な農業が考えられます。たとえば、赤土が多く出るところであれば、他の作物を植え付けするとかですね。今はただ漠然と耕耘して、放置して、雨が降ると流れる。前泊については、今後沈砂池を整備

していくのですが、それでも間に合わないと思う。あれだけの面積が一気に流れると、例えば時間あたり 50 ミリ以上の雨が降ると、どうしてもオーバーするというような状況がずっと続いています。だから排水の仕組みを変えとか、そういうことをやっていかなきゃいけない。いずれにしても、今後の農業のあり方を変えていかないと、おそらくこの島で農業が衰退するだろうというふうに非常に危機感を感じている。ですから先ほど言った、茨城県が取り組んでることに倣うべきです。儲かる農業、付加価値のあるものを生産していけば、おのずとみんなやりたくなります。儲かることをやらないと、もう後継者もいなくなる。今後、米についても調整監から出た有機農法でやってくと。キビについても化学肥料はなるべく使わない。堆肥を入れたりしてやっていくというような農業に変えていけば、豊かになって、もう間違いなく単収上がります。キビ植付けから収穫まで 1 年かかるんですよ。その間、キビだけじゃなくて、他の作物も作っていく。可能性のあるもの、付加価値のあるものを作っていく。伊平屋で農業をすると儲かるとなれば、若い人が「農業やってみたいな」ってことになると思うんです。米は人気がなくなってきてますけども、伊平屋の米おいしいって今でも言ってる人いるんだけど、現状「おいしい米」には程遠いのかなというような状況です。農業を必要最少限に抑えていって、スマート農業に変えていく。そういうことをしながら、農業のあり方を変えていきたいなと思っています。いずれにしても可能性はあるので、やっていくべきだと思います。

林会長 農業にしても、サンゴにしても自然環境を大切に、もし開発を行うにしても環境に負荷をかけない小さな開発をしながら、将来的に遺っていくものを作っていくことが重要だと思います。農業にしても、伊平屋の自然と共存した文化度の高いものを作っていきたいですね。

ムーンライトマラソンは、伊平屋島の「自然の豊かさ」「景観の美しさ」といった島の資源を保持しつつの観光開発みたいになっているのではないかと思います。これを一つのヒントに、農業でも昔から島で作っていた作物—今全国的に昔それぞれの地域で作っていた種を復活させる動きも出ていますと承知していますが—を復活させ、環境と共生した農業に取り組むというやり方もあるかもしれません。伊平屋でいうと、お米とか。他には何かありますか。

名嘉 過去には、玉葱なんかもいっぱい作っていました。ただ、販路がなく売れませんでした。ですが今は非常に交通の便が良くなっています。現在、東京・大阪などの都市には、アジア諸国の方々がたくさん住んでいます。この人達が求めているのは沖縄の野菜らしいです。ウリ類とかパパイヤとか。だから、沖縄からこうした野菜をどんどん送っているようです。そういう野菜を作る。戦略的に作りさ

すれば売れるといいます。イオン琉球の末吉相談役が、「名嘉村長イモ作ってください」という。「なんで？」という、沖縄の一番のヒット商品は紅芋タルトらしいんですけど、イオン琉球は紅芋タルトを売りたいのですが回ってこないといいます。なぜかという、紅イモを作る農家がどんどん減ってきているから。とにかく原料が足りないということのようです。読谷もイモ農家がいなくなってきて、御菓子御殿として非常に危機感を感じているらしいんです。観光客もコロナ禍からほぼ回復しています。そういうことから、相談役が、ウチの全店舗に出せる量を作れば全部必ず買う、一部店舗にしか出せない量なら買えないというんです。

林会長 伊平屋の土に合う農業や作物があると思うので、そういうのは検討しなきゃいけない。農家さんたちの高齢化とかもあるので、そういう意味ではスマート農業とか効率化できるところは効率化しながらやるとかも、ひとつかなと思います。海の良さとかの話であれば、さっきのサンゴ養殖の話だとかF大学の研究とかの誘致とかを全体で考えると、ということですよ。

名嘉 森林の整備ですよ。水源地の伐採をしないとかが先決。今ある川に水が流れてこないんですよ。昔は普通に流れていた川に水がない。それは要するに木が多すぎて、これが全部吸い上げるから。ですから水源地の整備もしっかりやっていくことも必要です。海を元に戻す方法の一つだと思います。

林会長 今離島で観光客が増え、いちばん問題になっているのが宮古ですし、竹富のホテルとかにいくとシャワーを使うのに時間制限があるんですよ。それだけ重要になっているので、そういう意味では、開発したり増えたときにどういう風な対応しなきゃいけないかっていうのはあるでしょうね。

名嘉 確か水は豊富にあるんだけど、地下からくみ上げるとどうしてもリスクがあります。水道施設がちゃんとしてますので、水の問題は特にないけれども、これから宮古島みたいに観光客がどんどん増えてくると、水が足りなくなるかもしれない。今のところ、水は豊富にあるので、これも一つのビジネスとして、ミネラルウォーターとして販売する。そういうことも可能性がある島なんです。

林会長 これから名桜大学も水道水を直接引いて濾過する実証実験をやる予定みたいです。

名嘉 ただそれではミネラルウォーターじゃないですよ。

林会長 まあペットボトルを削減するという目的で、やろうとしてるんです。

金城 よろしいでしょうか。

私はこの島で育った人間なんですけど、田名っていう集落には、以前は山肌にツツジが結構ありました。昔は山の木を伐採してましたから、ツツジがよく育っていました。伊平屋村の村花はツツジなんですけど、今では島にほとんどツツジがない。村長が言ったように、木が大きくなりすぎたのが原因です。観光と結び付けて考えた場合、伊平屋村にちょっと足りないのは、花がないということだと思います。観光客からお聞きするのは、「この島いいよね。素晴らしいよね。でも何か一つ足りないな」と。その足りないのが花なんです。伊江島ではユリが有名ですが、あれは人工的に植えたものです。でも島には昔からツツジがあったんです。昔からあった花を活かす。ツツジを山肌に復活させたいということはすごく思っていました。なかなか取り組めていませんが、今から変えていく。少し木を伐採して、ツツジがまた再生して、以前の風景が見られるような形にしていけたらうれしいですし、観光にもつながるのかなと思います。

あと、もう一点、サンゴについてですが、サンゴは陸上で育てて伊平屋の海に戻すということですが、本当に温暖化で育つものなのかなと疑問に思います。今いろいろな研究のなかで地球温暖化の中で育つサンゴっていうご説明があったんですけど、実際養殖して、そういうのが島の環境に合ってるのかどうなのか。逆に島の環境を駄目にしてしまわないか。やっぱり元々伊平屋にあるサンゴをだめにしてしまっちは元も子もないってところで、サンゴに関しては少し慎重に取り組むべきなのかなと思います。

名嘉 あれは伊平屋にある高温に耐えるサンゴ。30 度になっても死滅しないサンゴがあるんですよ。

金城 島にあるんですか。

名嘉 そうです。島にあるサンゴを養殖で増やしていく。そういう取り組みです。実際海に潜ると、白化しないサンゴはあるんですよ。白化しているサンゴの隣には白化していないサンゴがあったりして。ただ、温暖化の影響が定かではありませんが、平成 12 年か 13 年に同じように白化したんですよ。そういうサイクルがあるのか、水温が上がって。そういう繰り返しでしたんです

よ。だからまた水温が下がれば元に戻ると思ってるんですけど。ただ全部が白化しているわけではないので、まだかなりのサンゴが残っているんです。ですから、そういうのがまた来年産卵すると白化しているサンゴに着床して、サンゴが増えていく。おそらくずっとこの繰り返しをしてきたと思っているんです。気候変動もあったと思うんですけど。20年前にもそういう現象があったということで、また同じことになってるのかなと。いずれにしても森林の整備もしっかりしていかないと、なかなか海も復活しないのかなと思います。

林会長 そのほかに何かご意見とかございませんか。

津田 15 頁の戦略の推進というところに、文化度を高めるというものがあります。伊平屋は昔から海の幸、山の幸が豊富で、稲作っていうのは強みだと思います。沖縄県内どこでも作っているわけではなく、一部でしか作っていないという魅力もあると思います。しかし農家さんの高齢化もありますし、若い方達が農業をしないっていう問題もあって、お米がどんどん減っている。質に関しても、正直お客様に提供しづらいものもあって、とても残念に思っています。私はいまホテルに従事してまして、毎日朝食にお米を提供していますけど、本当は 100%伊平屋のお米を出したいです。これが出せる時期は新米が採れて 1 ヶ月くらいなんです。今の時期は本土のお米と伊平屋のお米を混ぜて出しています。本当はこれはやっちゃいけないとか、悲しいという思いもありつつ、その辺村民でも伊平屋のお米の質を残念がる声も多いので、村一丸となって米の質をあげて、みんなが毎日、伊平屋のお米おいしって言うてくれるようにならないかなって。

名護にファーマーズマーケットがありますが、そちらでは伊是名のお米が販売されています。サンエーでも伊是名のお米が販売されています。だけど伊平屋のお米はない。これも残念でして、いい米をつくって、販路を拡大して、伊平屋の農民の方たちと島にお金が落ちるような体制をつくってほしいかなと思います。伊平屋の誇りっていうのは、稲作でもあると思います。今日、農協さん（佐久川委員）いなくて残念なんですけど、村と農協が連携して、村の農家さんを育てるよう頑張してほしいです。

名嘉 まさにそのとおりだと思います。ライスセンターが来年完成します。また JA では、美味しい米を作ろうということで、従来のちゅらひかりに加えて、今年一期作で 2 品目（ミルキーサマーという石垣で作っているお米と、まだ奨励品種に指定されていない新種）増やしました。それでご飯炊いて、どれが

美味しいか役場の中でアンケートを採りました。３品種を比較したところ、残念なことにちゅらひかりは人気がありませんでした。これはライスセンターがしっかりしてないということもあるのかな、とは思いますが、年齢的に食味が変わったからかもしれません。

昨日も今日も JA と話しました。ちゅらひかりだけ作るのではなくて、伊平屋の中だけで流通するようにミルキーサマーも作ってはどうか、と言ったら、だったらできるって言うんです。島だけで流通するミルキーサマーだったらやってもいいって言うんですよ。

新垣 試食はしたけど、どれがどれだか分からない。

名嘉 議会は二つに分かれましたよ。行政はミルキーサマーが人気だったんですが。とにかく、いま津田委員が言ったように、これはまず最初に取り組まなければいけない課題だと思います。おそらく来年、再来年からはちゃんとした地盤ができるんです。お米が島内で流通するんじゃないかと非常に期待しております。いろいろと着工が遅れたんですけど、ようやく今年着手して、来年６月までには完成させると。その後は、低温倉庫もちゃんと整備しないと、米がみな酸化してしまうと。これをちゃんと整備していきますので。それで来年、一気に難しいでしょうけど、JA に言って伊平屋だけで流通するミルキーサマーを作って、とにかく伊平屋だけで流通させてといたら、できるといいました。

林会長 イモもやった方がいいかなと。

名嘉 イモも茨城を真似する訳じゃないけど、たとえば焼き芋を。伊平屋で施設を作るんです。蒸して、真空パックして冷凍して出していくんです。広島県福山市の漬物屋さんから「ウチが全部買い取るのでイモを作ってくれ」と。それでさっきいったようにサトウキビに依存するのではなく、他の売れる作物を作るとみんな農業をやろうとする。

林会長 どちらにしても戦略的に考えないといけないと思います。

林会長 今日いろいろとご意見をいただきましたが、いただいたご意見などを私の方で事務局と一緒にまとめて、取り入れるべきご意見などについては人口ビジョンに反映させてまいりたいと思います。改めて会議を設けるのも難しいかもしれませんが、人口ビジョンの文案の調整については会長一任というこ

とでご了承いただけないかなと思うんですけど、それでよろしいですか。

異議なし

林会長 それでは今日いただいたものをしっかりこの中に反映できるようにしていきたいと思います。

本日はこれにて協議会を終了させていただきたいと思います。それで、今後につきまして、事務局からご連絡等、お話頂ければと思います。

太田 今出た赤土の問題であったり、山の斜面のツツジの復活みたいなことは、5次総計の中の「自然環境の保全と活用、そして継承」「美しい景観の形成」というところに、正に書かれていますので、そこを先程申した通り戦略的にやっていきたいと思いますということかなと思っています。

それからもうひとつ、イモをつくりましょう、コメをつくりましょうというところについては、誰がそれをやるんですか、本当に売れるんですかって話になってくるわけです。この人手不足の中、誰がイモやコメを作るのか、栽培技術指導等はどうするのか、本当に需要があるのか、離島から物流コストをかけても儲けが出る価格で売れるのか。そういった観点を含めて、しっかりと議論していかなければいけないと思っています。

そういういろんなアイデアをどうやって実行に移していくのか。しっかりと議論して、総合的・戦略的に実行しなければなりません。役場はもちろん住民を交えしっかり取り組んでいかなければならない。役場でもしっかりやろうというところがございます。

5章が残っていますが、これは蛇足みたいなものなので、時間の都合もありましてみなさんでご確認頂ければよろしいのかなと思います。

最後に駆け足になりますが、資料3についてご説明します。

資料3 説明

林会長 ありがとうございます。それではこれで第4回伊平屋村産業経済活性化協議会を終了したいと思います。ありがとうございます。

太田 すみません。ひとつだけ。

第3回の協議会で議論百出となりました、イヘヤカシワークスさんであったり、米崎の話につきましては、様々な宿題をいただいたところではございますが、先程申した通り、予算要求に合わせてビジョンを先に議論しておきた

かったので、先延ばしにさせていただきました。次回協議会の場等で宿題返しという形で皆さんにご報告をさせていただきたい。そのことについて、ご了承をいただきたいと思いますと思っています。

※ 第4回 伊平屋村産業経済活性化協議会出席委員等

会 長	公立大学法人 名桜大学 副学長(地域創生担当)	林 優子
委 員	一般社団法人 伊平屋島観光協会 事務局長	金城 洋子(代理)
	伊平屋村漁業協同組合 代表理事組合長	新垣 雅士
	ホテルにしえ 代表	嘉納 雅代
	松金ホテル	津田 真樹子
	沖縄県商工会青年部連合会 会長	真栄田 孝
	(株) みらいおきなわ 代表取締役常務	譜久村 親(代理)
	伊平屋村 村長	名嘉 律夫
役 場		
	政策調整監	太田 浩一
	農林水産課長	伊礼 直樹